第３１話　菅原道真の誠忠

藤原氏の勢いが余りに強くなりすぎたので、宇多天皇はこれを弱めようとされて、菅原道真を重く用いられた。　しかし、道真は却って藤原氏に讒せられて、遠く大宰府に流された。

藤原氏の勢力がますます強まる

宇多天皇は、初めは**基経**を大いにご信任になって、関白の詔りをも賜り、政治の事はすべてお任せになっていたのですが、藤原氏がますます勢力を強めて、次第にわがままをするようになって来たのを御覧になると、後にはこれを抑えようとおぼしめした。　しかし、**基経**の勢いが盛んなために、なお暫くどうなさることも出来なかった。

ところが、ご即位の五年目に**基経**が病んで薨じたので、其の後は関白を置かれずに、御自分で政治をなされた。　たまたま**基経**の子は長子の**時平**がまだ 21 歳という若さであったし、外には藤原氏に大した人物も無かったから、天皇は以前から見込んでおられた**菅原道真**を重く用いて、藤原氏の勢力を分けようとされました。

菅原道真の家柄

そもそも**菅原道真**はどんな人だったのでしょう？

菅原氏の先祖は角力の元祖として知られている**野見宿禰**です。　**宿禰**は**垂仁天皇**に仕えて、始めて埴輪（土で作った人や馬などの形のもの）を作り、これを以って殉死に代えて、貴人の墓の周囲に埋めることにした人としてもまた知られています。

宿禰から 12 代の孫に当たる**古人**が、大和の菅原村に住んでいたところから始めて菅原の姓を名乗って、**清公**、**是善**を経て**道真**に至ったのです。　曽祖父の**古人**は**桓武天皇**の侍続となって、天皇に学問をお教え申し上げた人であり、祖父の**清公**は**最澄**や**空海**らが唐へ渡った時に遣唐使の判官となって**最澄**と同じ船で行った人です。　此の**清公**も父の**是善**も共に文章博士となったが、ことに父は参議という役をつとめて、**仁明**、**文徳**、**清和**の三代の天皇に仕え、其の功労も少なくなかったのです。

道真の生立ち

道真が生まれたのは**仁明天皇**の承和12 年 6 月 25 日で、幼名を**阿呼**といった。　代々学者の続いた家であっただけに、**阿呼**もまた幼い時から学問が好きで、其の上、生まれつき賢くもあったので、その上達も非常に早く、10 歳の頃にはもはや日本と中国との学問を一通り修めて、文章も上手に書けば、詩や歌も巧みに作ったといわれます。

11 歳の春には、「今夜は春ながら月もよく晴れて、梅もおもしろく咲いているから、詩でも作られたら如何です」といわれて、即座に作った詩に、

月 耀 如＝晴 雪＿　梅 花 似＝照 星＿　可」憐 金 鏡 転　庭 上 玉 房　馨

というのがある。　いかに其の才学が秀でていたかが分る。　15 歳の時に元服して名を**道真**と改め、いよいよ学問に精を出しました。

文武両道に達する

しかし、単に学問がすぐれていたばかりでなかったことに就いても、もう一つの逸話が伝えられている。

道真が 19 歳の時のことでしたが、或る日、師匠の **都 良香**のところへ行くと、大勢の門人らが集まって弓の稽古をしていた。　ふだんから**道真**の学問のよく出来るのを嫉んでいた連中のことで、「いくら**道真**でも、弓の心得はあるまいから、きょうは一つ恥をかかせてやろう」と、無理に弓を彼に渡して、ぜひ一つ射てみたまえと強いた。

道真は、迚も自分には出来ないからといって断りましたが、どうしても許してくれそうになかったので、「では一つ射てみましょう」と弓矢を取りました。　門人らは今こそ大いに笑ってやろうと、其のしくじるのを待っていると、**道真**は徐かに一本の矢を取って弓に番え、満月の如くにひきしぼって、ひょうと放ちました。　ぽんと音を立てて的に中った。　第二の矢も、第三の矢も、ぽん、ぽんと中りました。

門人らはこんな筈ではなかったがと思い、いかにも見事な腕前なのに、呆気にとられて、ただ顔を見合わせているばかりであったということです。

地方官を歴任

道真は 19 歳の時に文 章 生に挙げられ、初めて下 野 権 掾という役に就きました。　それから次第に昇 進して、33 歳の時には文 章 博士となり、42 歳の時には讃 岐 守に任ぜられて任国に赴いた。　其処では、人々をよくいたわって、親切に教え導いたので、人々から神さまのように敬われたということです。

或る年、いつまでも旱がつづいて、農民が天を眺めて青息をついていた時に、道真は自ら其の国の高い山に登って、熱心に神に雨乞いの祈りを捧げた。　と、忽ち大粒の雨が降り出して、今までからからに乾からびていた田畑をうるおしたので、人々はますます**道真**を慕うようになったという話もあります。

それで、いよいよ任期が満ちて都に帰ることになった時には、人々は皆親に別れるが如くに泣いて別れを惜しんだということです。

道真の栄進

さて**道真**が都に帰ったのは、**宇多天皇**の寛平二年で、其の翌年の正月に**基経**は薨じたのです。

かねてから藤原氏の勢いを抑えようとおぼしめしていた**天皇**は、一つは**基経**の子の**時平**がまだ若かったからでもありますが、わざと関白も太政大臣も置かずに、御自分で政治をみられ、以前から其の人物を見込んで大いに重く用いようと考えておられた**道真**を、此の時、蔵人頭に任じて、朝廷の大事な文書を

掌らせられ、政治のご相談相手となされた。　時に**道真**は 47 歳でした。

其の後、天皇のご信任はますます厚く、**時平**が中納言に進めば**道真**は参議になり、**時平**が大納言に進めば**道真**は権大納言に進むという風に、いつも**時平**より一段下ではあったが、次第に官も位も昇った。

遣唐使を停められる

寛平７年８月、天皇は特に**道真**を遣唐大使に任じて、**紀長谷雄**を副使として唐へ派遣しようとなされたが、其の頃は唐朝も既に末になって、国内はしきりに乱れていたし、わざわざ危険を冒して行っても、学ぶべき文物も多くはなかろうと思われた上に、わが国の文化も既に大いに発達してもいたので、**道真**はその旨を申し上げて、遣唐使を停められるように願って許された（西暦 894 年、訳注：道真は白紙に戻す遣唐使）。　**道真**のこの一言で、**舒明天皇**以来、長く続いて来た遣唐使をここで全く停められたのを見ても、**天皇**の御信任がいかに厚かったかが分かります。

一方、中国では唐が間もなく亡びて、しばらくの間は幾つかの国が興っては亡び、興っては亡びしていたが、第 62 代**村上天皇**の御代に宋が起きて初めて統一した。　又、唐の亡びた頃に、朝鮮でも新羅が亡びて、新たに**王建**が高麗という国を建てたし、朝鮮の北方から日本海へかけて広がっていた渤海という国も、**聖武天皇**の御代の頃からしばしば使いをわが国に遣わして貢物を奉ったりしていたが、これもまた唐や新羅と同じ頃に亡びました。

道真、御信任を受ける

さて**宇多天皇**は在位 11 年で、31 歳の時に位を皇太子に譲って上皇となられた。　次にお立ちになったのが第 60 代**醍醐天皇**です。

醍醐天皇は其の時僅かに 13 歳のご幼少でしたので、これまでの例に依れば、当然、摂政を置かるべきでしたが、**宇多上皇**のおぼしめしに依って置かれなかった。　思いますに、若し摂政を置くとすれば、**時平**をこれに任じなければならないが、かくては藤原氏の勢いを抑えようとなさるお考えに合わないことになるからであったのでしょう。

ご即位の翌々年に、**時平**を左大臣に任ずると共に、**道真**を右大臣に任じて、二人に並んで政治を輔けらせましたが、**天皇**及び上皇のご信任はもとより**道真**の方にあったのであります。

道真の謙譲

けれども、此の**道真**のような出世は曾て例のなかったことで、**時平**を除いては藤原氏の人々は勿論、皇族の人々すら皆其の下に立つようなことになったものですから、**道真**は誠に心苦しいことに思い、

「 わたくしは学問を以って世に立つべき家に生まれながら、特別のおぼしめしで、身分に過ぎた高い役に任ぜられましたが、かくては世の人々は思わくもありますし、迚も此の大役を満足に勤めることは出来ますまいから 」

と申し上げて、三度までも大臣を辞めさせて頂きたいと願い出たが、其の度ごとに却っていよいよ御信任が加わるだけで、お許しにならなかった。　それからは、更にいっそう誠意をささげて天皇をお輔けした

が、此の時、年は既に 55 歳で、世の経験にも富んでいたし、もとより学問もあり、考えも正しかったものですから、何事をしても手落ちがありませんでした。

ところが、**時平**は藤原氏の 嫡 統に生まれたおかげで 上 席 にはいたが、なにしろ、まだ 29 歳の若者であり、もとより**道真**ほどの学問もなければ、経験も浅かったものですから、**道真**と意見のちがうことが多く、従って政治の円満に運ばない場合がしばしばありました。

法王の 始

宇多上皇は御譲位の二年後に髪を剃って、法王になられていましたが、（上 皇 が坊さんになられると法王と申し上げます。　**宇多法王**はわが国の法王の始めです。）　此の様子をご覧になって、これはどちらか一人に政治をお任せになったほうがよろしかろうとおぼしめした。

ご即位四年の 昌 泰三年一月に、**醍醐天皇**が法王の御所である朱雀院においでになった時に、熟とご相談をなされた上で、**両皇**の御前に**道真**を召されて、「今から後は、天下の政治をお前一人で執り 行 うようにせよ」と仰せられた。

道真はご信任の厚いのに感激したが、既に藤原氏を始め、外の誰れ彼れからも其の出世を妬まれていることを知っていたので、此の仰せは固くご辞退申してお受けはしなかったが、どこから漏れたか、此の事が**時平**らの耳に入りました。　そうでさえいまいましく思っていた**道真**に、此の優渥なご沙汰が下ったと聞いては、もう此のままにして置く訳には行かぬということで、彼は**道真**を 陥 れる工夫を凝らした。

道真 讒せられる

たまたま**天皇**の御弟の**齊世親王**の 妃 が**道真**の 娘 であったことから、**時平**はこれに目を着けて、「**道真**は陛下の厚いご信任にも満足せず、畏 多くも陛下を廃し 奉 って、**齊世親王**を御 位 にお即けようとして居ります」と申し上げた。

天皇はあの忠義な**道真**に限ってよもやそんな事をする筈はないとはおぼしめしたが、お側の者らにお聞きになると、誰も彼もが皆、「それに相違ございません」とお答えしたので、さては本当かとお考えになって、乃 ち、**時平**らの申すがままに、急 に**道真**の右大臣を停めて、大 宰 権 師 という低い役になされ、遠く九州の筑前の国に追い遣ることとされました。

道真 筑紫に流される

そして同時に、其の男の子らも 悉 く諸国に分って流されました。　時に 昌 泰四年正月の事で、**道真** 57 歳でありました。　天皇は聡明な方でしたが、其の時まだ 17 歳というお年若でしたので、お側の者たちが皆**時平**の仲間に引入れられていたことには気がつかれなかったのです。

さて**道真**は、思いもよらない罪に落とされたのを大いに歎いて、

流れ行く われは水屑と なりぬとも　　君しがらみと なりてとどめよ

という一首の歌を**宇多上皇**に 奉 ってお助けを願いました。

清涼殿の御門外に一夜を徹し給う**宇多法皇**

時平の一味、法皇を阻み奉る

法王はこれをご覧になって大いに驚かれ、天皇と申してもわが子の事であるから、自分で行って申したなら、助けることが出来ないこともあるまい、とおぼしめして、正月 30 日に、急いで清涼殿に駆けつけられ、天皇にお会いになろうとされました。

しかし、**時平**の一味である**藤原菅根**らが御門を閉じてお入れ申しませんので、よんどころなく**法王**は其の門の外で、厳しい真冬の寒い一夜を徹してお待ちになりましたが、ついに天皇にお会いになれずに、其の翌日 2 月 1 日の朝、御心ならずもすごすごと朱雀院に御還りになりました。　　其の日は**道真**が九州へ向かって都を立たなければならない日でした。

最後の頼みをかけた**法王**のお力でも、ついにどうすることも出来ないことになり、昌泰四年２月 1 日、**道真**は今は住みなれた都を立ちました。

いよいよ邸を出ようとする時に、見ると、日ごろ愛していたに庭前の梅の花が、蕾もよほど大きくなって、今にも咲き出そうになっています。　**道真**はそれにすら心を傷めて、

東風吹かば　にほひ起こせよ　梅の花　　あるじなしとて　春なわすれそ

（訳注：一書では、　東風吹かば　にほひ起こせよ　梅の花　　あるじなしとて　春をわするな）

という歌を詠みました。

況して、四人の男の子らが離ればなれに別々の国に流されることを思った時の心持はどんなであったでしょう！　夫人と既に嫁した女の子らは其のまま都に残されたので、道真は幼い男の子と女の子とを二人だけ連れて出かけたのですが、次第に都が遠くになるにつれていよいよ心細さが募って来ました。**道真**は夫人の許へ、

君がすむ　やどの梢を　ゆくゆくも　　かくるるまでに　かえり見しはや

という歌を贈って、それから先を急がせた。

やがて播磨の国の明石の浦に着くと、此の地は**道真**が曾て讃岐守であった時に、たびたび往来した土地ですから、駅長（今の町長）は殊にねんごろに彼を迎えて、あまりに変わり果てた姿を嘆きますと、道真は、

駅長無」驚　時変改　　一栄一落是春秋

と書いて与えました。「何もそう驚くには当たらない。　時節に移り変わりのあるように、栄えたり衰えたりするのが世の中だ」という意味です。　無実の罪を被せられながら、誰を怨むという事もなく、一栄一落是春秋と、世の中を大きく観て、却って駅長に教えを垂れているのであります。

筑紫に於ける道真

さて日数を重ねて大宰府に着きましたが、もともと権帥というのは、大宰府の長官である帥と同じ資格だけがあって、勤めは何もない役の名なのですから、役所に出る必要はなかった。

道真は其の住居にと当てられた極めて粗末な家に籠って、一歩も門の外へは出ずに、ひっそりと慎んでいた。

普通の者なら、人をも世をも恨んだであろうと思われる境涯に置かれながら、**道真**はただ静かに書物を読んだり、詩や歌を作ったりして、独りで心を慰めていたのです。　けれども、過ぎ来し方を顧みると、さすがに淋しく悲しい思いがたまらなく胸に浮かんで来たことはあったでしょう。　其の年の５，６月の頃かと思いますが、

離」家三四月　　落涙百千行　　万事皆如」夢　　時々仰＿彼蒼＿

という詩を作っている。　「家を出て来てからもう三四ヶ月になる。　かれこれ思えば涙が出てたまらない。　ああ、何もかも夢のようだ。　そう思っては時々蒼い大空を眺めて見る」　という意味ですが、此のしまいの「時々仰彼蒼」の中には、実に無量の感慨が籠められているのです。

又、物哀れな夕方の煙を見て、

夕されば　野にも山にも　立つけむり　　なげきよりこそ　もえまさりけり

と歌って、それにも悲しい心を寄せ、又、月の明るい夜には、

海ならず　ただよう水の　そこまでも　　清き心は　月ぞ照らさん

と、飽くまでも清い自分の心を歌い、雨の日には、

あめのした　乾ける袖の　なければや　　着てしぬれぎぬ　干るよしもなき

と、罪の全く無実であることを歎いてうったえたりしていますが、それとて遠い九州のはてで、独りでひそかに呟いているようなものでありまして、誰もこれを都に伝えてくれる者もいなかった。　いかに侘しく頼りない気のしたことであったでしょう！

道真の誠忠

其のうちに、秋も半ばを過ぎて九月十日の夜となりました。　思えば、去年の今夜は清涼殿の菊の御宴に召されて、秋思という御題で詩を作ったが、其の詩が特別に天皇のおぼしめしにかなって、お褒めの言葉と共に御衣までも賜った。　其の御衣は今もここに在ります。

毎日捧げ持って拝んでいるのであるが、あわれや自分は去年とは全くちがった流竄の身となって、此の九州のはてで生きている。　去年のあの詩の中にも言ったように、天皇はお若いが、自分はもう年を取っている。　ご恩はかぎりがないのに、此の老先の短い身では、迚もお報いのしようがない。

お側にお仕え申していてさえそうであったのに、況して今の此の身でどうしてご恩返しをすることが出来ようそ！　**道真**は全く腸を絶つの思いがした。

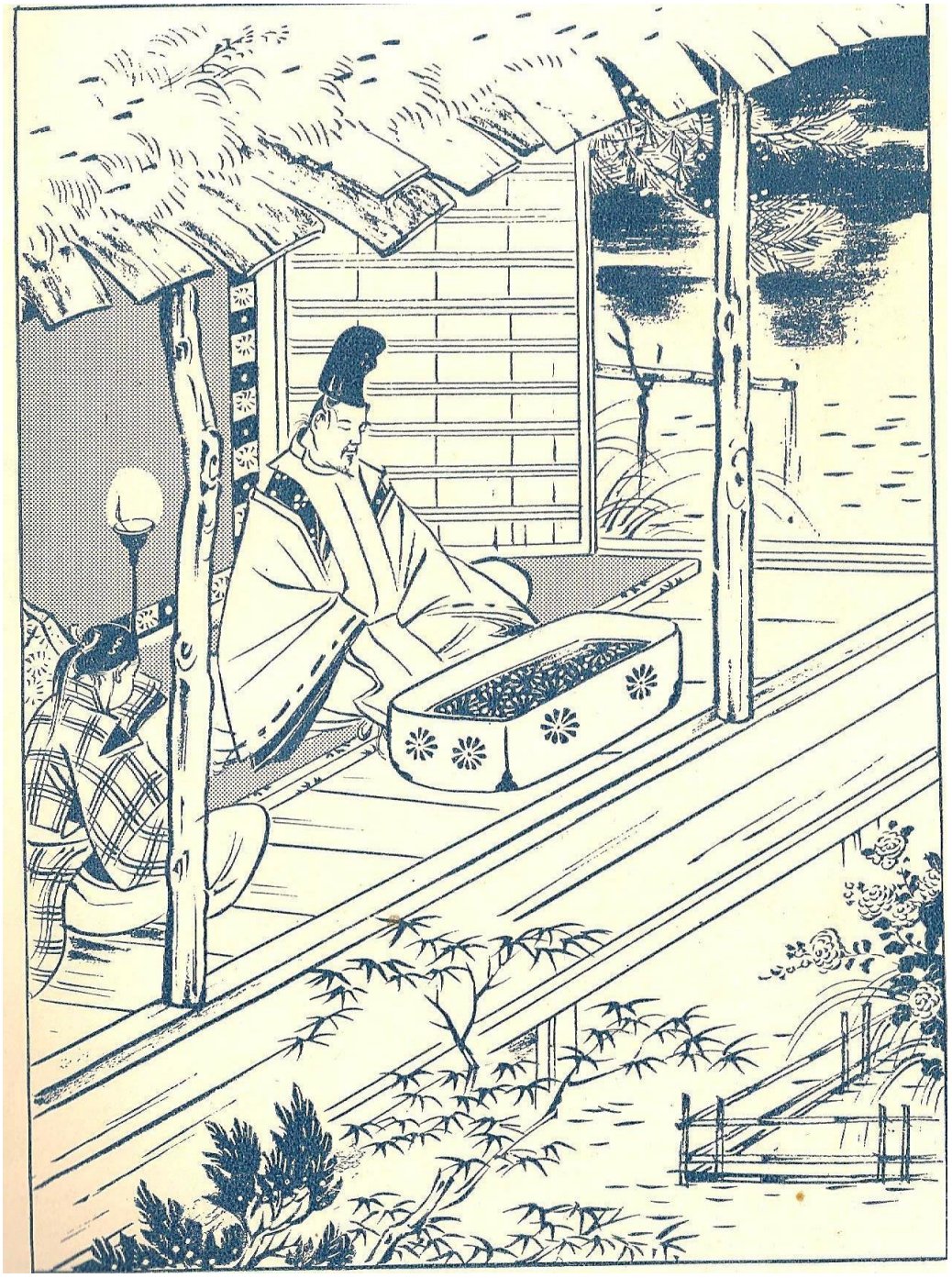
其の心中を詠じたのが名高い次の詩である。

去年今夜侍＿清涼＿　秋思詩篇独断」腸　　恩賜御衣今在」此
捧持毎日拝＿余香＿

いかに天恩の忝さを深く身にしめて、いささかも君を怨み奉る如きことのなかったのが実によく分かるではありませんか。

昌泰四年７月 15 日に改元して延喜元年となりましたが、**道真**は其の三年の正月、即ち筑前に遷されてからちょうど満二年目に病気に罹ったのがもとで、ついに無実の罪を身に着たままで其の 2 月 25 日に大宰府で亡くなりました。　年は 59 歳でした。

また、**齊世親王**は、**道真**が大宰府に遷された時に、髪を剃って坊さんになられました。　**天皇**に対して其の真心を明らかにされたのですが、全く根も葉もない讒言のために、親王までが一生を淋しくおくられることになったかと思うと、誠にお気の毒に堪えないのであります。



福岡　　大宰府に流された菅原道真

京都に災禍がつづく

しかし、悪い事をした者が其のままいつまでも栄えるということはめったに無いものであります。

道真が亡くなってから後、都にはしきりに旱とか、大雷雨とか、火事だのというような災禍がつづいて、世の中が騒がしかったのですが、わけても不思議なのは、**道真**を讒した**時平**の一味の者が陸続と死んだことです。

延喜六年７月には大納言**藤原定国**が死に、八年10月には、嘗て**宇多法王**を清涼殿の門外に真冬の寒い一夜を夜もすがらお立たせした不忠の臣、**参議藤原菅根**が雷に撃たれて死に、其の翌九年４月には**時平**が俄かに病気に罹って、幾日も非常に苦しんで、ついに僅か39歳で死に、その四年後の３月12日には、右大臣**源　光**が猟に出ていて、泥の中へ落ちて死にました。

まだそればかりではなく、**時平**の娘が女御に　まいっていた皇太子がお薨れになり、其の御子で次

の皇太孫になられた王子もまた亡くなられ、其の御母の女御も続いて亡くなりました。　のみならず、**時平**の男の子も二人まで若くして死んだ上に、延長八年６月26日、清涼殿に雷の落ちた時には、嘗て**道真**を流すことの相談に与った者が五人までも一度に雷に撃たれて死にました。

世間の人は大いに**道真**を惜しんでいましたので、これらの災禍を皆彼の祟りの為であるとして疑いませんでした。　しかし、あの忠誠な**道真**にどうしてかような事が有り得ようかとは思いますが、又一方、世間の者が祟るのを当然と考えたほどにも**道真**の無実の罪は明らかでありまして、一般からも深く同情されていたことが分かるのであります。

醍醐天皇もまた、だんだんお年を経ると共に、**時平**らの讒言にまどわされたことを後悔されていましたが、ついに延喜二十三年４月に**道真**の官を元の通りに復して、右大臣とし、正二位を贈られたのみならず、**道真**を罪にした時の書類をば悉く焼棄てになった。　其の後、第66代**一條天皇**の御代には、**道真**に更に左大臣正一位を贈られ、ついでまた太政大臣を贈られました。

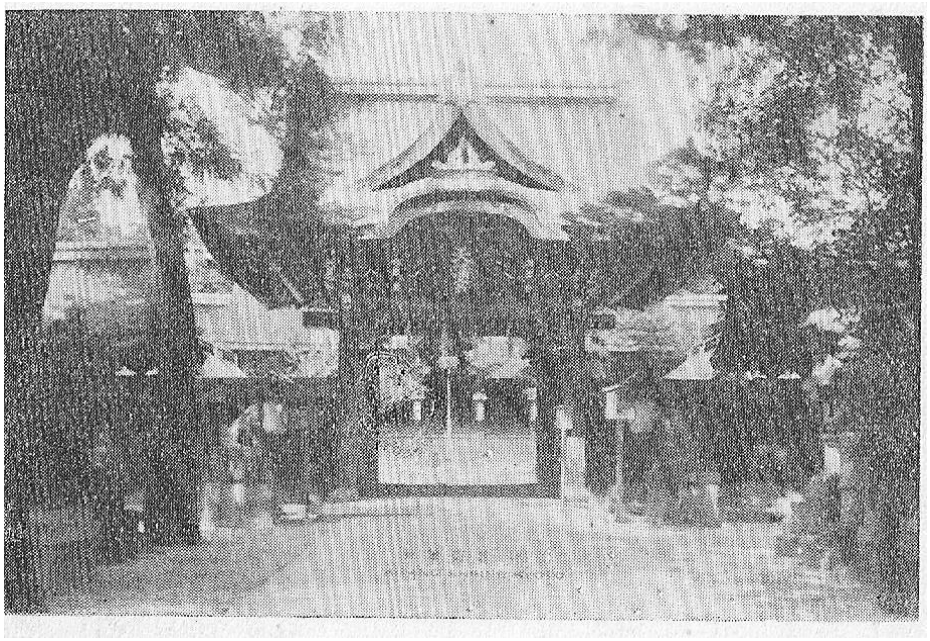
天満天神

さて筑前の大宰府では、**道真**の亡くなった二年後に、早くも其の墓所に社を建てて、其の霊を祀りましたが、これが今の官幣中社大宰府神社の起りです。

其の後、京都では、第62代**村上天皇**の御代の初めに、人々が北野に社を建てて**道真**を祀り、天満天神といってこれを尊敬しました。

これがが今の官幣中社北野神社の起こりですが、**一條天皇**が太政大臣を贈られた上に、その祭りにまでおいでになって、御尊信なされてからは、参詣の人がいよいよ多く、後には文道の神として全国に分かち祀られるようになりました。

今では日本国中いたる処に天神様の祀られていないところはないという有様になっています。



京都　　北　野　神　社

一体、官幣社には大、中、小の三種ありますが、其の祭神は神代の神々か天皇か皇族の方々かを祀るのが普通であり、臣下を祀った社で官幣社と同じ取扱いを受ける神社は、特に別格官幣社ということになっています。　然るに独り**道真**だけは、臣下でありながら官幣中社に祀られているのです。　朝廷のご尊信がいかに篤いかも分かります。

醍醐天皇の御仁慈

又、**醍醐天皇**はご幼少の頃こそ**時平**の讒言に惑わされて、**道真**をお流しになるような過ちをもされたが、やがてご成人の後は、極めてご英明で、立派に政治をなされた。

わけても御仁心が深く、つねに民を憐れませられた。　或る冬の夜も、雪がひどく降って、風さえ烈しく吹いた時に、**天皇**は、「御殿の中にいてさえも寒さが酷しく身に染みるのに、況して、賤の伏屋の着物の少ない者らはどんなにか寒く苦しんでいるのであろう」とおぼしめして、わざと御衣を脱がせられた事もあります。

又、臣下にお会いなる時には、いつもにこにこと笑顔をみせておられたという事ですが、これは、厳格にしている人には物が言いにくいが、打ち解けた様子をしていると、誰れしも物が言い易いからで、つまり、何事も十分に聞きたいと思うからであると仰せられていました。

延喜の治

天皇はまた学問を好まれたので、学者や歌人なども多く出で、文化も大いに進みました。　後世、この御代を延喜の聖代といい、天皇の事を延喜の帝と申して古今の明君に数え奉っています。

延喜は天皇の御代の年号の一つでありますが、最も長く続いて 23 年にも及んだので、此の年号で御治世を代表させているのです。　天皇は在位34 年、46 歳でお崩れになり、皇太子が立って第 61 代**朱雀天皇**となられた。　御年が僅かに八歳でしたから、**時平**の弟の**忠平**がまた摂政となりました。

（ **第 31 話**　菅原道真の誠忠　終わり。　　次は一旦前頁に戻り、

第 32 話　天慶の乱　　へ）